

方言認知地図を通して地元方言のアイデンティティを探る¹

ダニエル・ロング

1. 「方言認知地図」の研究概要

方言とは、言語の地理的変異（バリエーション）のことを言い、方言学とはその地理的変異を客観的、かつ科学的に研究する学問である。一般話者が方言の実態を必ずしも正確に把握していないことを理由に、方言学者の間では、一般人の方言意識を無視すべきだという意見もあった。一方、一般話者の持つ言語変異に対する認識にあえて注目すべきだという言語意識研究もある。本研究はこうした言語意識研究の一環として位置付けることができる。話者の意識や態度を、社会心理的事実としてその実態を明らかにすることを目的とし、ひいては言語変化のメカニズム解明にもつながると考えられる。

なお、この研究で言う「方言」とは、標準語と対立するものだけではなく、標準語も非標準語も含まれる言語変種のことである。従って本稿では、「方言」を「言語変種」と同様に使う。さらに今回の研究は、従来の言語意識研究とは違い、個々の話者の意識から一般的傾向を抽象化するだけではなく、その意識の空間的側面を具体的に探ることに特徴がある。

これまで、日本語の方言認知地図に関する筆者の研究を概説しておこう。まず、Long (1992)では、方言認知領域の背景にある特徴を、言語的なものと非言語的に分けてその分類を試み、さらに「関西弁」の認知領域の地域差を見た。次に、ロング(1995)やLong (1997)では、「標準語」の使用領域が話者の出身地方によって異なること、特に、関西インフォーマントの「標準語」に対する意識が他の地方出身者とは著しく違うことがわかった。Long (1998)では、「感じのいいことば」の認知領域がインフォーマントの出身地方によってどう違うかを分析した。

今回の方言認知地図の調査は、方言の専門的な知識をもたない一般話者に、県境のみを記した日本の白地図を渡し、地図上に次の事を記入するようにお願いした。

- (a) 使っていることばが違ふと思われるところで線を引くこと、
- (b) それぞれの地域のことばは普通何と呼ばれているか（そのことばの呼び名）を書くこと、
- (c) それぞれの地域のことばに「感じのいい」順の番号をつけること。

数百のインフォーマントが描いた方言認知領域を一枚の地図に表わすために、それぞれの領域の重なり具合を数量化した。この数量化をより厳密に行うために、インフォーマントの手書き地図を全てディジタイザーでコンピュータに入力し、日本の領域を2万7千個の枠目に分けて集計を行ったのである。²

このような方法で計算した方言認知地図をもとに、一般の話者の言語意識をこれまでと違う観点から追究することができる。8つの地方の出身者を対象にして調査を行ったので、それぞれの結果を比較することにより、その地方の話者の方言意識やアイデンティティの特徴を探ることが可能となった。

日本の方言をいくつに分けるか、どの方言を書き表すのかという判断をインフォーマントに任せたとこ、インフォーマントによる2つの違いが表れ、2つの課題が明確になった。1つ目の課題は、どの言語変種を描いたかということである。この問題は2節と4節(図1~8)で分析する。

2つ目の課題は、それぞれの言語変種領域の広がり方ある。これは、例えば、同じ「関東弁」の認知領域を書き表す際、複数のインフォーマントそれぞれが描いた境目の位置がずれていたことに起因する。最も多くのインフォーマントによって描かれた認知領域は、「関東弁」のイメージの最も濃い領域と言える。逆に少数の人しか示していない領域は「関東弁」のイメージの薄い地域である。これで「関東弁」の「認知度合い」をみることができる。図9~12でそれぞれの言語変種の「認知の度合い」(perceptual density)が分かるように表示されている。

2. 地元方言を指すさまざまな言語変種名

話者がそれぞれのことばの領域にどのようなラベル(関西方言、大阪弁、標準語など)を貼っているかを考える。調査に参加した756人のインフォーマントが延べ5517の方言認知領域を書いた(言語変種名の異なり数=257種類)。言語変種名(speech variety label)を地理的標識(locative)と非地理的標識(non-locative)の二種類に分けることができる。前者の方が圧倒的に多く、「東北弁」、「名古屋弁」、「琉球語」、「下町言葉」、「西日本方言」、「ウチナーグチ」など、場所を示しているものはこれに当たる。後者には、「標準語」、「ズーズー弁」、「アイヌ語」、「現代ことば」、「べらんめえことば」など、場所を示さないものが含まれる。地理的標識は二つの要素から成り立っている。それは、地名の部分である地理的表示(locative descriptor)と言語変種表示(variety descriptor)である。言語変種表示の88%は「~弁」であり、残

りの12%には、「～語」（標準語、アイヌ語）や「〇〇言葉」（京言葉）が多く含まれていた。なお、方言学者が使っている「方言」という呼び方は全体の4%に止まっていた。

この研究では、8つの地方（東京、名古屋、岐阜、金沢、大阪、広島、福岡、鹿児島）で地元出身者を対象とした調査を行なった。まず、インフォーマント全体として次のような傾向が見られた。最も多かったのは「東北弁」（8割以上）と「関西弁」（8割弱）の領域を書いたインフォーマントであった。これに次いで、約半分が「九州弁」と「名古屋弁」を示していた。「標準語」の領域を示したは3人に1人、「京都弁」、「関東弁」は4人に1人となっていた。次に、それぞれのインフォーマント集団が地元方言(home dialect)をどう呼んでいるか見てみよう。

3. 地元変種の方言認知

東京インフォーマントの内、ほぼ3分の1ずつが地元のことばを「標準語」（33%）や「関東弁」（29%）や「東京弁」（28%）と呼んでいた（図1）。興味深いことに、自称と他称との間に大きなギャップが現れている言語変種名があった。「共通語」という変種名は東京インフォーマントでは一人の回答にしか現れなかった。しかし、金沢、大阪、福岡のそれぞれのインフォーマント集団で2人以上の回答に見られた。この他に、東京地方のことばを指す名称としては色々な呼び方が予想できるが、756人のインフォーマントにはほとんど出現しなかった。こうした少数派の例として、「下町弁」は2人のデータに出てきて、「江戸っ子弁」、「下町ことば」、「東京・共通語」、「べらんめことば」はいずれも1人の回答に止まっていることがあげられる。

名古屋インフォーマントでは、「名古屋弁」（70%）が圧倒的に多く、半分の人がその隣に「三河弁」を描いていた（図2）。「尾張弁」を使ったのは、このインフォーマント集団のわずか7.6%であった。ここでも、言語変種名の自称と他称との違いがはっきりしている。「中部～」という名称は全インフォーマント中、20人（「中部方言」10人、「中部弁」9人、「中部地方弁」1人）の回答で使われていた。この数字自体は非常に低いのだが、もっと驚くべきことは、この方言名が当てはまると思われる名古屋インフォーマントや岐阜インフォーマントのデータにはまったく現れていないことである。すなわち、「中部方言」などは他人からこの地方のことばを差す言い方としては使われることがあっても、自らのことばの呼び名として使われることがないことが分かった。

図1 東京インフォーマント 総合地図 (n=75)

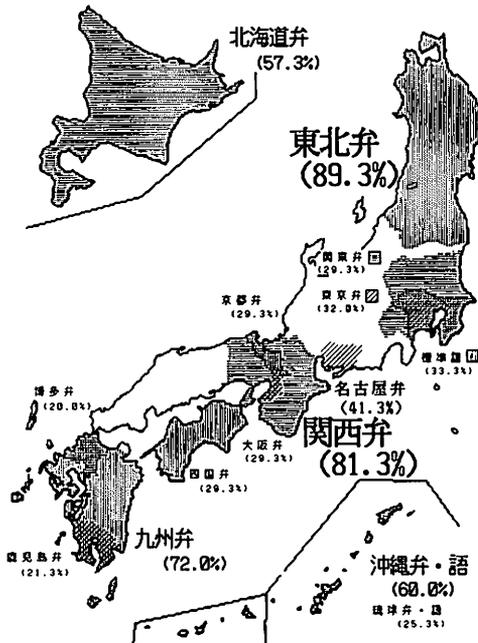
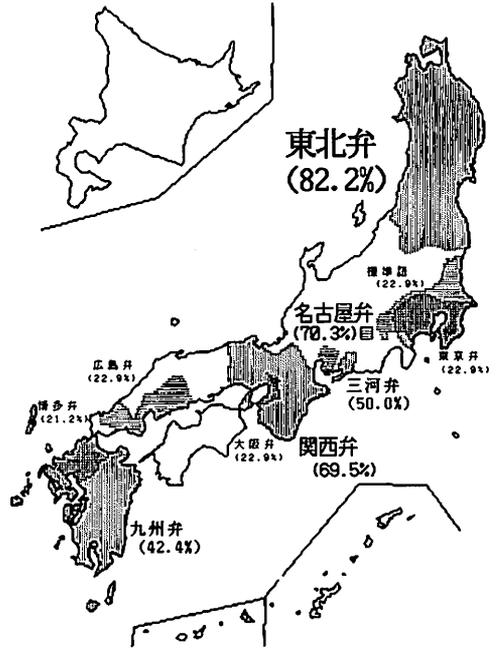


図2 名古屋インフォーマント 総合地図 (n=118)



岐阜インフォーマントでは、「岐阜弁」の出現率はわずか17.9%にとどまっており、岐阜インフォーマントのほとんどはこの変種名を使わないことが分かった。むしろ、彼らの多く(75%)は「名古屋弁」という変種名をあげて、その中に地元を含む形で使用領域を描いていた(図3)。

金沢インフォーマントのほとんど(82.6%)は地元のことばを「金沢弁」と呼んでいた(図4)。「石川弁」という名称を使っている金沢インフォーマントは一人だけであり(全インフォーマントを見ても5人)、この呼び方はほとんど使われていないことが分かった。方言学者の間では関東方言、東北方言と並んで、北陸方言の存在が指摘されているが、「北陸弁」という名称はわずか8.7%にとどまっている。一方、金沢以外の7つのインフォーマント集団では、「北陸弁」と答えた人は合計40人になっていたのに対し、「金沢弁」はわずか1人であった。ここでも、自称と他称との違いが明確に出ているのである。

図3 岐阜インフォーマント 総合地図 (n=28)

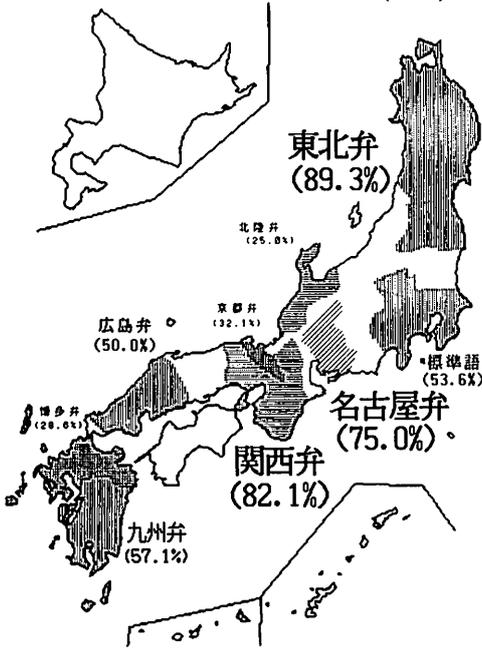
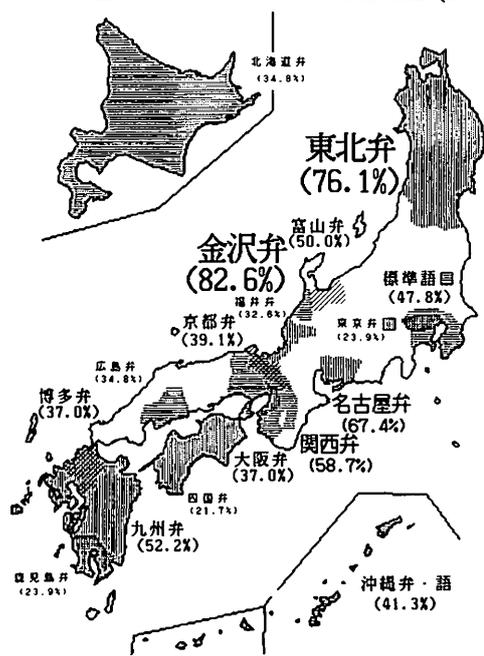


図4 金沢インフォーマント 総合地図 (n=46)



大阪インフォーマントでは地元のことばを「関西弁」と呼んでいた者が 79.5%と圧倒的に多かった(図5)。予想された「大阪弁」や「京都弁」の出現率はそれぞれわずか 18.0%と 13.1%であった(このように出現率 20%以下の言語変種は本論の地図では記述していない)。これ以外の言語変種名では、「近畿方言」はわずか2人で、「近畿弁(?)」と記入したのは1人であった。関西の中ではより知名度が高いと思われる「河内弁」を、関西地方の一部の名称として「河内弁」と名づけたのは、大阪インフォーマントのうち6人であった。

広島インフォーマントの多く(82%)は地元のことばを「広島弁」と呼んだ(図6)。8つのインフォーマント集団を見ても、「広島弁」を描いている人は平均して32%に達しているので、これは知名度のやや高い言語変種と言える。全員のインフォーマントをみると、「中国～」という変種名を使ったのは36人(「中国弁」27人、「中国方言」5人、「中国ことば」1人、「中国地方弁」1人、「中国四国弁」2人)であったが、こうした呼び名を使った広島インフォーマントはゼロであった。方言話者自らが使う自称とほかの地方の人が使う他称との大きなギャップがあることをあらためて印象づける結果であった。

図5 大阪インフォーマント 総合地図 (n=244)

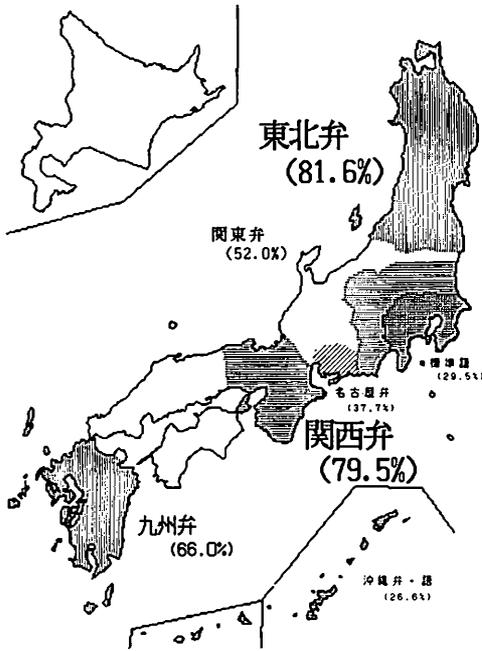
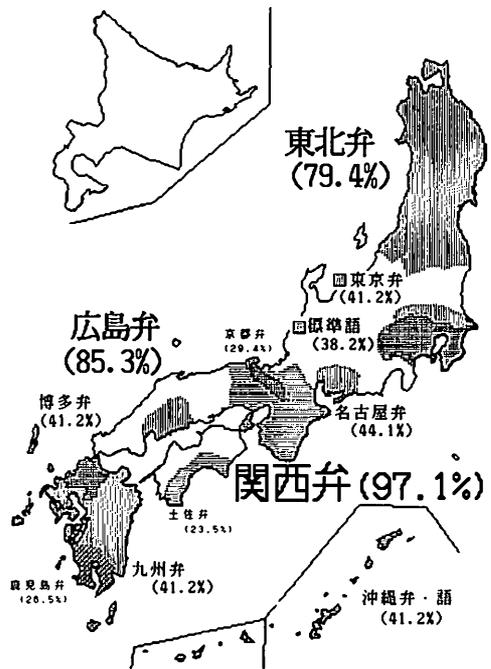


図6 広島インフォーマント 総合地図 (n=34)



福岡インフォーマントが、地元ことばの呼び名として最もよく使っていたのは「九州弁」(46.5%)と「博多弁」(39.5%)の二つであった(図7)。一方、「福岡弁」という言い方はほとんど使われていないことが分かった。全インフォーマントを見ると「福岡弁」を使っていたのは合計18人であったが、その中に含まれる福岡インフォーマントは1人のみであった。

鹿児島インフォーマントの多く(87.2%)は地元のことばを「鹿児島弁」と呼んでいた。「九州弁」と答えたのは23.2%であったが、図7と図8の認知領域を比較すると分かるように、福岡インフォーマントと違って鹿児島インフォーマントのほとんどは、地元の地域は「九州弁」の中に含まれるものではなく、それと対立するものとしている(図8)。

図7 福岡インフォーマント 総合地図 (n=86)

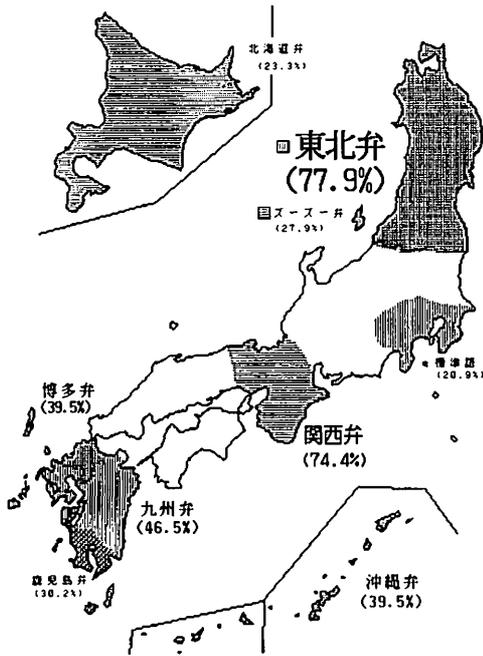
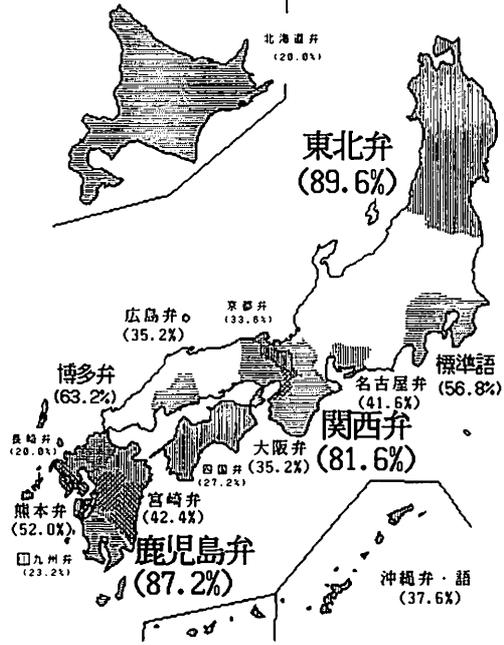


図8 鹿児島インフォーマント 総合地図 (n=125)



以上、方言認知地図で使われた言語変種名の分析から言えることは次の通りである。
 (1) 個人差はある程度見られるものの、ある地域のことばの呼び名についての共通認識が高いことが多い。
 (2) 方言学者の間で使われている名称と一般のそれとのずれがある。
 (3) 地元の人々が使っている言語変種名と他地方出身者のそれとは大きく異なる場合がある。

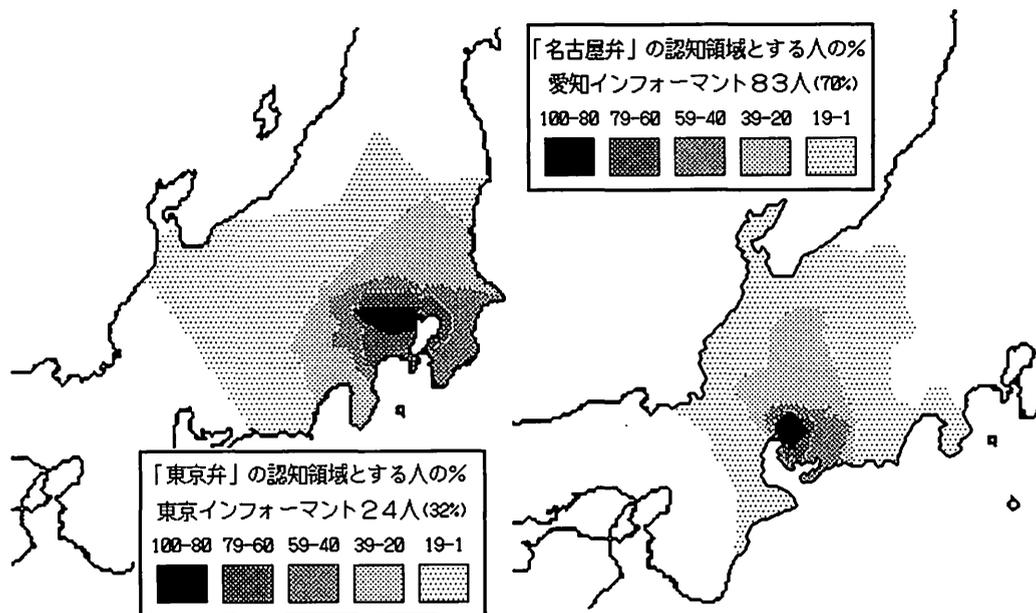
4. 地元方言の地理的範囲

ここで、それぞれのインフォーマント集団が地元方言の地理的範囲をどのように認識しているか見ることにしよう。その地元方言の比較をしやすいするため、「東京弁」、「金沢弁」などの方言認知地図を作成した。

図1では、東京調査のインフォーマントの3人に一人が「東京弁」の領域を示している事が分かったが、その領域が具体的にどこの地域を指しているかは別の問題である。「東京弁」の認知領域の「核」(「80%以上」のレベル)は東京都であるが、インフォーマントの「60-80%」のレベルでは神奈川県や千葉県の一部が含まれる(図9)。このように、通常「東京」と言われている地域よりも、「東京弁」の認知領域が広い

傾向が強いことから、表1で「拡張的」(expansionistic)の項を「○」にした。以下で取り上げる他の7つのインフォーマント集団に関しても、インフォーマントの60%以上は言語変種名として使われている地名より広い領域を描いていることを「拡張的」であることの見安とした。

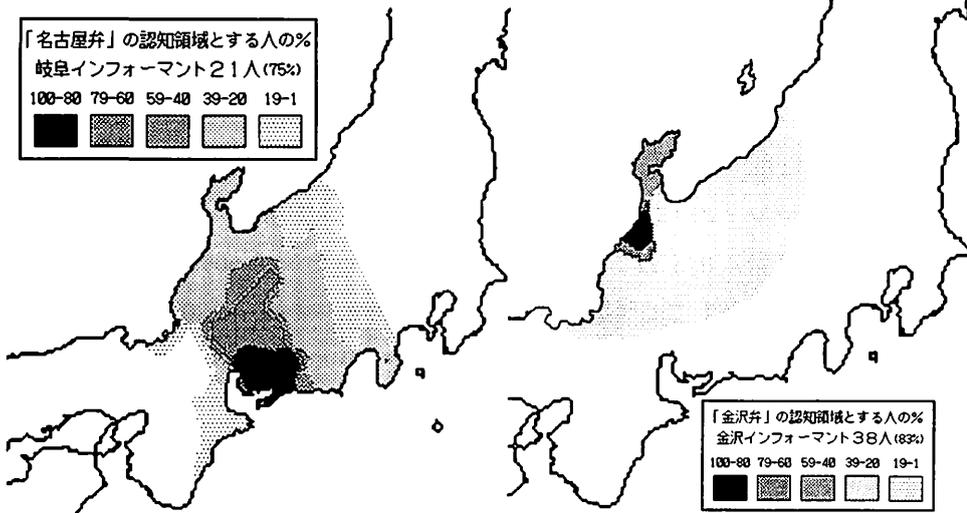
図9 東京インフォーマントによる「東京弁」 図10 名古屋インフォーマントによる「名古屋弁」



名古屋インフォーマントによる「名古屋弁」(図10)を見ると、その核(8割以上)は名古屋市を中心とする尾張地方であり、「6割以上」のレベルでも現代の愛知県の領域に止まっている。これは上の「東京弁」の拡張的傾向とは違う。

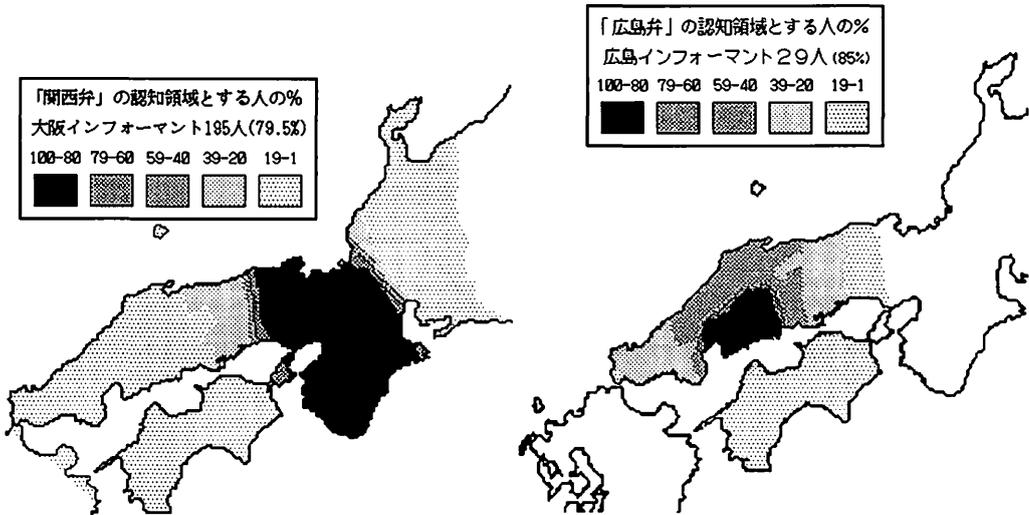
岐阜インフォーマント28人のうち、「岐阜弁」を描いたのは20%にも満たない5人であったので、その地図を省略する。(その5人が描いた「岐阜弁」の認知領域は岐阜県の領域に当たる。)より重要なのは、インフォーマントの75%(21人)は「名古屋弁」の認知領域を描いていたことである。この21人が描いた「名古屋弁」の領域(図11)を見ると、ほとんどの人(60-79%)は地元岐阜を「名古屋弁」の中に入れていくことが分かる。

図 11 岐阜インフォーマントによる「名古屋弁」 図 12 金沢インフォーマントによる「金沢弁」



金沢インフォーマントによる「金沢弁」(図 12)では、「80%以上」と「60-80%」のレベルはほぼ同じ地域になっている。その認知領域が初めて石川県全体に広がるのは「40-60%」のレベルで、しかも石川県よりさらに広い「金沢弁」を描いた人はごくわずか(20%以下)であったため、「拡張的」、「段階的」とも×を付けた。

図 13 大阪インフォーマントによる「関西弁」 図 14 広島インフォーマントによる「広島弁」



「大阪弁」の認知領域を描いた大阪インフォーマントは20%にも満たなかった(44人=大阪インフォーマントの18%)。その44人が描いた「大阪弁」の領域は大阪府を中心とし、6割のレベルでは奈良県全体と兵庫県の南東部まで含む形になっている。むしろ、大阪インフォーマントの多く(79.5%)は地元の方言として「関西弁」を挙げている(図13)。

広島インフォーマントの「広島弁」を図14に示した。「広島弁」の領域は「60-80%」のレベルでは、広島県に止まっているが、一段と下がった「40-60%」のレベルでは、島根県まで入るので、表1では「拡張的」に△を付けた。また、「80%以上」の「核」の領域とそれ以下の「40-60%」のレベルとのギャップが大きいので、この認知領域を「段階的」とした。

認知領域が少し広めになっている「東京弁」に比べて、福岡(図15)や鹿児島(図16)のインフォーマントにとって、地元の方言の使用領域は自分の県の範囲に限られているようであるので、両方の要因を×で記した。

図15 福岡インフォーマントによる「福岡弁」 図16 鹿児島インフォーマントによる「鹿児島弁」

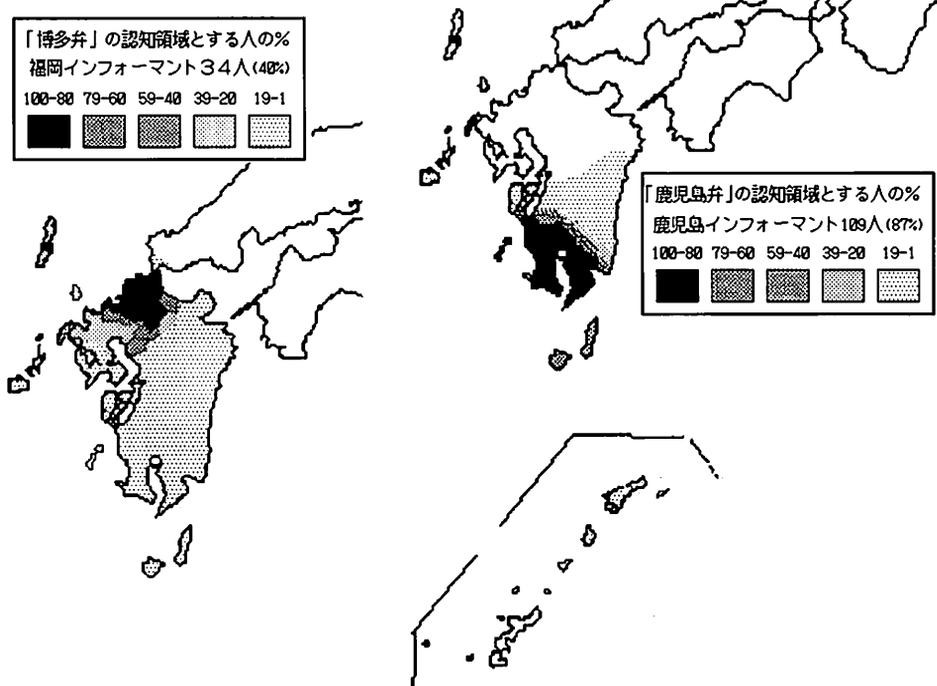


表 1. 地元地方の方言認知地図の状況

インフォーマント集団	東京 Tokyo	名古屋 Nagoya	岐阜 Gifu	金沢 Kana- zawa	大阪 Osaka	広島 Hiro- shima	福岡 Fuku- oka	鹿児島 Kago- shima
認知領域の特徴								
上位方言 (hyperlect)	○	×	×	×	○	×	○	×
隣接方言 (neighboring dialect)	×	○	○	○	×	×	×	○
地元方言 (home dialect)	○	○	×	○	×	○	○	○
拡張的 (expansionistic)	○	×	—	×	—	△	×	×
段階的 (incremental)	○	×	—	×	—	○	×	×

凡例：○ この方言が描かれている、あるいはこの特徴を持っている。× この方言が描かれていない、あるいはこの特徴を持っていない。△ 有無の判断が微妙。— 当てはまらない項目。

以上の結果をまとめると、地元の方言使用領域を、地元（の県境）を超えたものとして認識しているのは、東京インフォーマントの「東京弁」と広島インフォーマントの「広島弁」（ある程度）であった。そして、地元方言の認知領域に関する個人差が大きかったためにその認知地図が段階的に見えるのも、東京インフォーマントの「東京弁」と広島インフォーマントの「広島弁」であった。

5. 隣接方言の認識

ここでは、インフォーマントが地元の周辺地域の方言をどのように描いていたかを通じて、「隣接方言」(neighboring dialect)に対する認知の度合い、あるいはその違いを考察したい。

それぞれのインフォーマント集団の総合地図(composite map)には色々な情報が入っているため見にくい。そこで総合地図を見やすくするため、次の2点の単純化を図った。第1点は、少数のインフォーマントしか描かなかった方言は総合地図に載せないことにした。その基準として、20%以上のインフォーマントが描いた方言のみを載せることにした。第2点は、上で見たようなパーセントの違いによる「認知の度合い」を示さずに、それぞれの言語変種の6割以上の領域だけを示すことにした。

東京インフォーマントの結果を見ると、地元のことばである「東京弁」や「標準語」の周辺にあることばを意識していないことが分かる（図1）。すなわし、「千葉弁」や「横浜弁」などといった隣接方言の存在は認識されていないようである。

名古屋インフォーマントは「名古屋弁」とそのとなりの「三河弁」を意識している人は多いが、その周りの地域は空白になっている。つまり、このインフォーマントのほとんどは中部地方の諸方言を無視したのである（図2）。

岐阜インフォーマントはいろいろな点において名古屋インフォーマントと共通しているが、一つ違うのは、岐阜インフォーマントがその隣にある「北陸弁」を意識していることである（図3）。名古屋の人々にとって、北陸のことばの存在はさほど身近に感じないせいか、名古屋インフォーマントはこうした隣接方言を描いていない。

金沢インフォーマントは、地元の周りにどのような方言が使われているかという具体的なイメージをもっている。インフォーマントの半分強は「富山弁」、3人に1人は「福井弁」を描いている（図4）。

大阪インフォーマントは、大阪の周辺の方言（例えば、京都弁、播州弁など）を認識していない結果となっている（図5）。大阪人は、非常に方言に敏感であると言われるが、これは意外な結果であった。

広島以外の7つのインフォーマント集団は中国地方の方言を曖昧に描いている。具体的に言えば、「広島弁」はよくあげられているものの、それ以外の方言を書いていない。ところで、地元の広島にも同じような傾向が見られる。広島インフォーマントは、地元方言を意識しているものの、まわりの地方のことば（隣接方言）については触れていない（図6）。これは山陽、山陰、および瀬戸内海をはさんだ四国地域を通じて言えることである。自分の東方に関西弁の存在をほとんどのインフォーマントは意識しているし、西方には「博多弁」を含む「九州弁」があり、そして四国の太平洋側に「土佐弁」を描いている人もいるが、自分のまわりの方言はほとんど意識していないようである。

福岡インフォーマントの地図には、「博多弁」という地元方言と、九州全体を覆う「九州弁」がある。それ以外に、九州や中四国地方の方言をほとんど書いていない。福岡が九州や中国地方においてリーダー的存在である自己意識を持っていることがこうした結果の背景にあるとも言えよう。唯一の例外は同じ九州でも地元から最も離れた「鹿児島弁」であり、この方言の飛びぬけた存在感を反映しているだろう（図7）。

鹿児島インフォーマントの結果は福岡とは対照的なものになっている。彼らは、地

元の周辺に「熊本弁」(52.0%)や「宮崎弁」(42.4%)を描き、複数の隣接方言を示している(図8)。

6. 言語変種の重層構造と上位変種

ここでは、話者が全ての諸方言を同レベルのものとして認識しているかどうかという「言語変種の重層構造」(stratification of linguistic varieties)について考察したい。例えば、東京インフォーマントの方言認識では、地元の方言である「東京弁」の領域は、より広い領域をもつ「関東弁」の中に含まれている。この場合、「関東弁」のように他の方言を含む言語変種を「上位変種」(hyperlect)、そしてその中に含まれるものを「下位変種」(hypolect)と呼ぶことにする。こうした「言語変種の重層構造」をより分かりやすくするため、インフォーマントが描いたすべての方言認知領域を一枚の総合地図にまとめることを試みた。それぞれの地方のインフォーマントが描いた方言の重層構造、つまり「地元方言」とそれを含む「上位方言」の有無については、表1に示してある。

東京インフォーマントの結果(図1)を見ると、「東京弁」と認識されている領域は東京と神奈川となっている。これより一回り大きく描かれている言語変種は「標準語」で、これには千葉も加わる。さらに大きいのは、「関東弁」の認知領域で、山梨、茨城、栃木の3県までが加えられていることが分かる。つまり、地元の方言である「東京弁」が「関東弁」の中に含まれる下位方言として位置づけられている。

名古屋インフォーマントは「名古屋弁」や「三河弁」を描いているが、「中部地方方言」のようにそれを含む上位変種を描いていない(図2)。なお、方言認知地図の調査でよく問題にされることは、インフォーマントが本当にことばの領域を意識しているかそれとも単に社会的に認識されている地域の区分(行政区画など)を描いているかということだ(Preston 1989; 沖 1986も参照されたい)。しかし、今回の調査結果を見れば、インフォーマントは単なる地域区分を意識しているだけではないという主張が成り立つだろう。名古屋は中部地方の中心都市であることは、名古屋人自身にもかなり意識されているだろうが、今回の調査結果では中部地方が空白になっている。このことは上の主張の裏付けになるのではなかろうか。

岐阜インフォーマントは、地元方言を書いた人が非常に少なく、28人のインフォーマントの20%にも満たなかったため、図3では「岐阜弁」は示していない。しかし、全体の75%にあたる21人は「名古屋弁」を示していた。岐阜の地域を「名古屋

屋弁」の領域の中に含む人も多かった。

金沢インフォーマントの結果(図4)を見ると、「金沢弁」、「富山弁」、「福井弁」のそれぞれの領域が重複せずに分布していると認識されているが、それらのすべてを含む地方全体の方言(例えば、「北陸方言」など)の存在は認識されていないことがわかる。大阪インフォーマントの結果(図5)を見ると、関西地方全体を一方言圏にしていることが分かる。つまり、インフォーマントは「関西弁」の下位分類もしない。

広島インフォーマントは「広島弁」が属する広い地域に分布する上位方言の存在も認めていない(図6)。福岡インフォーマントはの多くは「九州弁」という上位方言を描いている(図7)。この中には地元の「博多弁」と「鹿児島弁」が含まれる形となっている。鹿児島インフォーマントの傾向は、福岡のそれと大きく異なる(図8)。鹿児島の人は九州の諸方言を含む「九州弁」という上位方言を描いてはいるものの、地元の「鹿児島弁」をこの中には位置づけていない。

7. まとめ —— 方言認知の類型の試み

上で見てきたような言語意識は、いくつかに分類することが可能である。それぞれの特徴を浮き彫りにし、そしてその類を覚えやすくするため、様々な政治体制にたとえて、名づけを行いたい。

名古屋、金沢、鹿児島の3つのインフォーマント集団は表1の項目で類似するパターンを見せている。これらは、地元の方言も書くし、その周りにもいくつかの方言を描く。しかも、それらはみんな独立したものであり、全部を結ぶ上位方言の存在を意識していない。これは、昔のアテネやスパルタのように自分自身の独自性を意識しながらも隣の存在も意識し、しかも、超国家的な連盟には属しないという実態に喩えて、「都市国家型」(City State)と呼ぶことにする。

岐阜はで自らの存在を主張せずに、「名古屋弁」の中に自身を位置づけている。これを政治体制に例えるなら、自分たちは大国家に属しているという片思いがあるが、その国家は自分たちの存在をあまり意識していない属領に似ていることから、これを「属領型」(Dependency)と呼ぶ。現に、岐阜方言は名古屋方言の影響を受けている(真田信治 1991)。これから解明しなければならない問題は次の二つの可能性のどちらが実態に近いかということである。すなわち、(一)岐阜の話者は自分の方言が名古屋弁と変わらないという意識を抱いている結果、名古屋からおそってくる言語変化

の波に対するガードが低くてその影響を受け易くなっているか、(二) 岐阜は名古屋弁の影響を受けていて、名古屋弁と似て来た結果、意識がその実態と合うように変わって来たのか、である。要するに、言語意識は言語変化の原因なのか、その結果なのか、それとも二つの要因が循環的になっているのかという問題である。

大阪は、地方全体を覆う「関西弁」を意識しているが、その中でいくつかの下位方言に分けていない。これは、「国は一つだ。それ以外の分けかたがない」と主張する統一国家主義者的な状況に喩えて、「統一国家型」(Unified Nation)と呼ぶ。実際の言語使用状況においても、関西地方の中の(言語的/方言的)な均一化が進んでいると報告されているが、大阪の人は関西地方全体が同じ方言を話しているという意識を持っていることがわかる。

広島は「鎖国型」(Seclusionist State)で、地方全体を含む上位方言の存在を意識していないが、周りの地域にそれぞれの方言があることも認識していない。西日本の言語的均一化が進む中で、広島(中国地方の他の地域と同様に)外の影響をあまり受けずに本来の姿を保ち、独自性を守っている。その典型的な例として断定助動詞の「ヤ・ジャ」があげられる。近畿をはじめとし、四国、岐阜、愛知地方、北陸、九州にわたってジャからヤへの変化が見られる。西日本では中国地方だけがこの大規模な変化に参加していない。こうした方言維持の根源がこうした方言意識にあると推察される。

「ジャン」「チャッタ」という表現は全国的に広がっているが、関西の人にとってこれらは「東京弁」に思われてしまい、それに対して拒絶反応を起こす。しかし九州の人は東京弁だと思わないし、受け入れている(陣内1996)。言語使用は、かなり話者のアイデンティティと係わっているが、本研究は言語的アイデンティティを捉えようとしているものである。

福岡と東京は「上位方言」、「隣接方言」、「地元方言」では似たパターンになっているが、「拡張的」と「段階的」ではこれらの意識はまるで正反対である。東京のインフォーマントにはまとまった意識が見られず、3分の1ずつが「標準語」、「東京弁」、「関東弁」と言っている。これはまさに、アイデンティティ・クライシス(自己認識の危機)と言えよう。すなわち、自分たちのことばは果たして、「標準語」と言えるか、それとも「方言」というべきか。もし、「方言」ならば、それは関東一帯に広がる共通性があるのか、それとも東京独特なものなのか。このような言語的帰属意識をめぐる動揺が見られる。

東京や福岡に見られる意識は「自治区型」(Autonomous Region)と呼ぶ。自分を主

権国家の一部として位置づけているが、全体の中では自分だけは特別な地位に置かれていると意識する。そして、国の自分以外の地域は特に意識しない自治区のような意識を示している。

以上、方言認知地図という方法論を通じて、方言学に関する専門的な知識を特に有しない日本語の一般話者が抱えている言語変種の使用領域に対する意識を見た。その調査結果からそれぞれの地方に住む話者がもつ言語的アイデンティティの特徴を抽出した。これからは、自分の話していることばは何と呼ばれているか（言語変種の呼称）や、それがどこまで使われているか、周辺地域の人々は自分と同じ方言を共有しているかどうか、といった方言的アイデンティティと関わる要因と言語変化との関係を追究していきたい。

関連文献

陣内正敬 (1996) 「北部九州における方言新語研究」九州大学出版会

Long, Daniel (1992) *The Role of Linguistic Features in Perceptual Dialect Regions. Proceedings of the XVth International Congress of Linguists. Québec: Les Presses de L'Université Laval, 371-374.*

Long, Daniel (1997). *The Perception of "Standard" as the Speech Variety of a Specific Region: Computer-Produced Composite Maps of Perceptual Dialect Regions.* In Alan Thomas (Ed.) *Issues and Methods in Dialectology.* Bangor: University of Wales Bangor, Department of Linguistics, 256-270.

Long, Daniel (1998) *Mapping Non-Linguists' Evaluations of Japanese Language Variation.* In Preston, Dennis R. (Ed.) *A Handbook of Perceptual Dialectology.* Amsterdam: John Benjamins.

Preston, Dennis R. (1989) *Perceptual Dialectology: Nonlinguists Views of Areal Linguistics.* Dordrecht: Foris.

沖 裕子 (1986) 「方言イメージの形成」 『国文学』 63 :1-15 (関西大学国文学会)

ロング, ダニエル (1990) 「方言認知地図の書き方と読み方」 『日本方言研究会 研究発表会発表原稿集』 50:7-16 (日本方言研究会)

ロング, ダニエル (1995) 「方言認知地図」 『パソコン国語国文学』 啓文社, 157-171

ロング, ダニエル (1998) 「日本の方言認知地図選考地図集」 『日本語研究センター報告』 5 : 121-160 (大阪樟蔭女子大学日本語研究センター)

ロング, ダニエル (1999) 「方言認知地図に見られる地元のアイデンティティ」『こ
とばの二〇世紀 (20 世紀における諸民族文化の伝統と変容 6)』194-207 (ドメ
ス出版)

真田信治編 (1991) 『彦根～岐阜間グロットグラム調査報告書』 (「幕末以降の大阪口
語変遷の研究」研究成果報告書 [真田信治研究代表者])

¹ 本稿の第 1～3 節は、ロング 1999 を増訂したものである。

² この方法の詳細に関してはロング 1990 を参照されたい。なお、ソフト開発は、ロ
ング [プログラム構成]、藤田雅巳 [DOS 版]、菅谷広治 [DOS 追加版]、大西功 [ウ
ィンドウズ版] によるものである。

Daniel Long (ダニエル・ロング)